



書評『劍橋中國文學史』（ケンブリッジ中国文学史）上下二巻

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017693

書評『劍橋中國文學史』
(ケンブリッジ中国文学史) 上下二卷

大 平 桂 一

大阪府立大学人文学会 人文学論集 抜刷

第40集 (2022年3月)

書評『劍橋中國文學史』 (ケンブリッジ中国文学史) 上下二巻

大 平 桂 一

今回書評するのは、『劍橋中國文學史』上下二巻、英文名は“THE CAMBRIDGE HISTORY OF CHINESE LITERATURE”である。編者は孫康宜 (Kang-i Sun)¹と宇文所安 (Stephen Owen)²の両氏。本書には生活・讀書・新知三聯書店2013年刊行の大陸版と聯經出版社2016年刊行の台湾版がある。著者も訳者も同じ二つの版本であるが、二者の間には簡体字と繁体字以外に大きな差異がある。

大まかに言うと、上巻は大陸版、台湾版ともに「1375年之前」、すなわち古代から明以前を扱うのに対して、下巻は大陸版が「1375-1949」、下巻が「1375年之後」となっている点である。この点に関して孫康宜氏は二つの版本の中文版序言の末尾でそれぞれ次のように言っている。

大陸版：

第二に、様々な理由により、我々のこの簡体字による中国語訳の年代の下限は1949年で切られているため、英文版では扱われている1949年以後の中国の文学・文化の状況については、本書では割愛されざるを得なかった。この点についてはご理解頂きたい。(中国語訳の下巻のイントロダクションでは、英文版の1949年から2008年までの文学史の編纂の事情を紹介した文章が残されており、それによって読者の皆さんが割愛された部分のおおよその内容を理解していただけると思う。) 幸いなことに、やがて台湾の聯經出版社が全訳本を刊行して下さるので、それが本書のよき補いになるはずで

1 孫康宜氏はイェール大学Malcolm G.Chace'56東アジア言語文学講座教授。主な研究領域は中国古典文学、特に六朝及び明末清初の抒情詩、中国の女性文学史。著書に『抒情與描寫：六朝詩歌概論』(Six Dynasties Poetry, 1980)、『情與忠：陳子龍、柳如是詩詞因緣』(The Late Ming Poet Ch'en Tsu-lung: Crises of Love and Loyalty, 1991)、共編著に『明清女作家』(Writing Women in Late Imperial China, 1999)がある。

2 宇文所安氏はハーバード大学James Bryant Conant 特級講座教授、比較文学系と東アジア言語文明系で教鞭をとっている。主な研究領域は中国古典文学、特に唐詩の研究者として名を馳せている。2018年、世界的に権威のある台湾の唐獎を漢学部門で受賞した。著書に『晚唐』(The Late Tang: Chinese Poetry of the Mid-ninth Century, 2006)、『中国文論：英譯與評論』(Readings in Chinese Literary Thought, 1992)がある。

ある。

台湾版：

第二に、以前生活・讀書・新知三聯書店出版から出版された簡体字による中国語訳の年代の下限は1949年で切られている。しかし、この度、聯經出版社がついに「全訳本」を出してくれたことは、本書にとって最高の補いとなる。というわけで、我々は聯經出版社の胡金倫氏に、特に心からの感謝の気持ちを捧げる次第である。

この二点が二つの漢訳版テキストの大きな違いなのであるが、それ以外に、大陸版は横組み、台湾版は縦組み、大陸版の索引で示される数字は頁数ではなく、聖書のような「節」であり、台湾版は頁数そのものであるという違いがある。

『劍橋文學史』上下二巻は大陸版で1466頁、台湾版で1431頁という大変なボリュームなので、章ごとに内容をまとめ、気づいたことを述べ、面白い記述を引用し、最後に総評を書くという形式にしたい。なお目次は基本的に台湾版によった。

『劍橋文學史』卷上

聯經中文版序 孫康宜

「聯經中文版序」では、編集方針すなわち、(一) ケンブリッジ中国文学史は参考書ではなく、専門書として編纂された。(二) 西欧の研究者、あるいは専門外の読者に中国文学史と文化史の基本的知識を提供する。(三) 伝統的なジャンル分けや時代区分にこだわらない。例えば、初唐を魏晉南北朝の延長として扱う、などなど。(四) 過去の作品が後代の人々によってどのように濾過され再生していったかを丁寧記述する。巻末にあげた参考書は英文の参考書に限ったこと。などが述べられている。

英文版序 孫康宜 宇文所安 (Stephen Owen)

「英文版序」では、この文学史が他の文学史とは異なり、「必要な時にだけ作品の紹介を行う」それは、「大多数の状況下、作家の生涯がその作品の受容と不可分一体となっている場合を除き、作家個人ではなく、歴史的な言語環境と著作の方式（訳者注、いわゆる*écriture*であろう）に重点を置いた。」というこの本の重要な特徴が書かれている。

致謝 宇文所安

卷上導言 宇文所安

「卷上導言」では中国文学史を編纂することの様々な困難性（「中国文学」が文言、口語、あるいはその混合体によって表記されたこと、「標準語」と「方言」の対立、仏

典の翻訳などに見られる外来文化の影響など）が語られた後、各章節の内容と各朝代の歴史が要約される。

第一章 早期中國文學—開端至西漢 柯馬丁（Martin Kern）³

- 一 漢語及其書寫系統
- 二 甲骨文與青銅器銘文
- 三 『詩經』
- 四 「國風」與早期闡釋傳統
- 五 『尚書』中的詔令
- 六 戰國時期的敘事文學與修辭
- 七 讀寫能力的問題
- 八 戰國文本譜系的漢代建構
- 九 戰國哲学、政治話語文本
- 十 『楚辭』
- 十一 早期帝國的詩歌
- 十二 西漢的歷史敘事與雜史敘事
- 十三 秦與西漢的政治、哲學論著
- 十四 經典的地位

第一章では、先ず漢字の構成が手際よく述べられる。漢字の総数がだいたい八万個であること、漢字の三つの特徴（表形文字ではなく表音文字であること、漢字の形式の不変性）など要領よくまとめられている。「漢字の第二の特徴は、漢語の孤立性に最も符合しており、文字の形が不変であることである。古典文を制作する時には、普通は過度の助詞（虚詞とも「功能詞」とも称する）の使用を避けており、この種の文言は時制、数詞、性別、文法の関係からいって、非常に経済的であり、またきわめて不確定でもある。同時に漢語の口語が運用されている地域はかなり広く、各種の方言の数も多い。しかし、漢字は安定しているため、これらの方言の歴史的变化は、文字には表れてこないため、議論することはできない。あるいは更に重要なことかもしれないが、文字が安定しているため、言語や文化が安定しているという幻想が生まれたのである。これは人をして畏怖せしめる現実、三千年を経て連綿として断絶のない文学の伝統が存在するとい

3 柯馬丁（Martin Kern）はプリンストン大学東アジア研究科主任教授。東北大学中国文学論集第19号（2014年12月30日）所収の「アイデンティティと方法—国際漢学とは何か—」を参照のこと。彼の学問的遍歴と「国際漢学」にたいする見解が語られており、非常に面白い。

う幻想であった。」(42頁)などという記述は非常に興味深い。また、甲骨文と青銅器の銘文と『詩経』や『尚書』の間に密接な関係があることが特に強調されている。また現存する先秦のテキストが漢代の編集によって大きな変更が加えられたことを、新たに出土した資料によって裏付けている。『論語』『老子』『莊子』『史記』『呂史春秋』などにも目配りがされている。

第二章 東漢至西晉 (二五一—三一七) 康達維 (David R. Knechtges)⁴

一 東漢文學

- (一) 概述
- (二) 班氏家族及其同時代人
- (三) 崔氏家族
- (四) 杜篤與馮衍
- (五) 桓譚與王充
- (六) 兩種新興の散文文體：銘、箴
- (七) 東漢中期
- (八) 張衡
- (九) 馬融與崔瑗
- (十) 兩位南方人：王逸與王延壽
- (十一) 東漢末年
- (十二) 東漢末年的「論」
- (十三) 趙壹
- (十四) 蔡邕
- (十五) 東漢詩歌

二 建安時期

- (一) 概述
- (二) 鄴城文學「沙龍」
- (三) 曹植與曹丕

三 正始時期

- (一) 概述
- (二) 竹林七賢

4 ワシントン大学中国文学教授

(三) 阮籍

(四) 嵇康

四 西晉文學

(一) 概述

(二) 潘岳

(三) 陸機與陸雲

(四) 張協・左思・左棻

(五) 西晉賦

(六) 劉琨・盧諶・向東晉過渡

第二章では後漢から西晉までを取り扱う。有名な作家が個人、あるいは家族の単位で論じられる。建安時期では、曹丕の「典論」に始まり、建安の七子の文業が説明される。孔融にからめて禰衡や楊修がとりあげられているのには一驚を呈した(189頁)。はるか四十数年前、私はこの三人を当時はやりの「トリックスター理論」を使って論じ、「孔融・楊修・禰衡」というレポートを書いて荒牧典俊先生に提出したからである。それ以後、この三人を並べて論じた例をみたことがなかったのだが、最近の流行なのだろうか。嵇康の「琴賦」を紹介したくんだり、「この賦の正文では、嵇康は先ず楽器の材質の地理的環境を描写する慣例に従って、琴制作に最も適した桐が成長する地理的環境を描写する。長い紙幅を使って山水の景色を述べた後、嵇康はその地方が隠者、神仙の住む地であり、彼らがそこにやって来た理由は世俗の束縛をのがれるためのみならず、木を伐採して琴を制作するためであると語る。その後、彼は琴の制作過程、琴の音色、琴の音楽本体、琴の音楽の各種の音調を枚举する。この賦の結末で、琴の奏でる音楽がその演奏を聴くものに与える影響を描写して終わる。最後に、琴は「至人」の楽器であると称賛する。」(202頁)非常にスマートな記述であると思う。

第三章 從東晉到初唐(三一七一六四九) 田曉菲(Xiaofei Tian)⁵

一 四世紀的文學

(一) 東晉(三一七一四二〇): 概述

(二) 文學的社會用途

(三) 記敘

(四) 内省的山水: 詩與文

- (五) 其他的詩歌題材和賦
- (六) 樂府
- (七) 文學批評
- (八) 陶淵明
- (九) 十六國文學

二 五世紀的南方文學

- (一) 概述
- (二) 寫作與社會
- (三) 謝靈運
- (四) 顏延之
- (五) 鮑照和江淹
- (六) 劉義慶及其文學集團
- (七) 絕句的興起
- (八) 永明一代

三 六世紀的南方文學

- (一) 梁武帝的統治和文化菁英的崛起
- (二) 文學生產：目錄、類書、選集
- (三) 文學批評
- (四) 宮體詩
- (五) 其他文學形式
- (六) 「北方」和「南方」的文化建構
- (七) 創傷和離散：書寫江南的沒落
- (八) 餘燼

四 五世紀初至七世紀初的北方宮廷

- (一) 概述
- (二) 五、六世紀的北方文學
- (三) 從隋煬帝到唐太宗

第三章は、まず「概述」において、この時期に紙が普及したため、漢代の作家に比して作品の数が飛躍的に増えたことが指摘される。この文学史は常に各時代の文学を表現する媒体に注意が払われているが、第三章はその嚆矢である。次にとりあげられるのは、郭璞の「江賦」であり、この作品が、南方における晉朝の中興を寿いているという『晉中興書』の説を紹介したうえで、「(郭璞は) 長江を南方各省を潤す川としてだけでなく、

さらに重要なことに、「華裔を限る」川であるとして描写しており、晉王朝の南方統治は中国文化の正統であると確認したのである」（232頁）と述べている。作品のジャンルとしては、一般的な詩文以外に王羲之、王獻之父子の書簡があげられ、それらが晩明の小品文に靈感を与えたという指摘がある。その他この章段で面白いのは、「十六國文學」の部分で、東晉と同時代の北方諸国の文学状況を活写している部分である。「陽休之の弟陽俊之は、540年に一組の六言の歌辭を創作した。この歌辭は「淫蕩で拙い」と言われているが、非常に流行し、「陽五伴侶」の名で、民間で大いに売れたらしい。伝説によれば、ある時繁華街に立ち寄ったところ、書店に出ていた写本に誤りがあり、「手に取って改めよう」としたらしい。店員は、彼が誰か知らず、彼を大いに責めたて、これらの詩は「古の賢人」の作で、「君にどんな知識があるのか知らんが、この写本についてあれこれ言おうとするとは何事か！」このような伝説によって、我々は写本中心の世界で、テキストがどのように流通し写されていくのかを垣間見させてくれる。」（292頁）

第四章 文化唐朝（六五〇—一〇二〇） 宇文所安

- 一 概術
- 二 武后時期（六五〇—七一二）
- 三 玄宗時期：「盛唐」（七一二—七五五）
- 四 佛教寫作
- 五 安史之亂後（七五六—七九一）
- 六 中唐一代（七九二—八二〇）
- 七 最後の繁榮（八二一—八六〇）
- 八 唐朝的没落和地方政權時期（八六一—九六〇）
- 九 新朝（九六〇—一〇二〇）
- 十 敦煌敘事文學 伊維德（Wilt L. Idema）⁶

第四章「文化唐朝」のユニークさはその時代区分である。六五〇年は唐の太宗が亡くなり（六四九年）、高宗が即位し、則天武后との共同統治が始まった年である。その年を以て「文化唐朝」の開始とするのには理由があり、則天武后は太宗朝まで権力の中核にあった豪族の勢力を弱めるために科挙出身の人材を登用しようとし、旧勢力と科挙出身者のせめぎあいはずっと続き、その決着がついたのが宋代の初めであったという見立てなのだろう。この章段のもう一つの特徴は、玄宗時期：「盛唐」（七一

6 ハーヴァード大学東アジア語言文明系榮退教授

一七五五)、「安史之亂後」(七五六一七九一)、「中唐一代」(七九二一八二〇)、「最後の繁榮」(八二一—八六〇)、「唐朝の没落和地方政權時期」(八六一—九六〇)、「新朝」(九六〇—一〇二〇)のように、時代順に記述しており、詩、散文、伝奇小説などのジャンル別の記述にはなっていない点である。第四章の執筆者である宇文所安氏は、唐代文学の権威であり、特に中晩唐の詩人論は非常にシャープである。就中、杜牧の一段は杜牧の生涯と詩風を要約して余すところがない。また、円仁の滞華日記も紹介されている。最後の「敦煌敘事文學」は敦煌変文を始めとする敦煌関連の文献をコンパクトかつ的確に紹介している。「大目乾連冥間救母變文」は、まったく異なった(評者注:直前に「降魔變文」の説明がある)物語を講じている。目連は出家して僧となった後、自分のすでに亡くなった両親が死後にどうなっているか知ろうとする。彼は父は極楽に生まれ変わっているが、母は地獄でひどい責め苦を受けていることを発見する。彼は地獄へ行行って母親を救うが、各層の地獄の地形、管理や残酷な刑罰が事細かに描写される。仏陀の援助により、目連は最後に母を救うことに成功する。この伝説は七月十五日の仏教の「鬼節」と関係があり、このテキストも毎年の「鬼節」に演じられ、聴衆が両親のために進んで布施をするように誘導するのである。同様の物語が「因縁」と短編の「講經文」にも見える。後の数世紀において、この伝説は演劇の台本に改編され、中国における最も壮観な宗教劇となり、多種類の異なったテキストが今も残っている。」(383頁)

第五章 北宋 (一〇二〇—一一二六) 艾朗諾 (Ronald Egan)⁷

- 一 概述
- 二 梅堯臣、歐陽修與新詩風的出現
- 三 歐陽修與文藝散文
- 四 王安石：作為詩人的政治改革家
- 五 蘇軾
- 六 黃庭堅和江西詩派
- 七 佛教與詩歌
- 八 題畫詩
- 九 宋詞
 - (一) 張先、晏殊
 - (二) 柳永：有爭議的綜合

7 カリフォルニア大学セントバーバラ校中國文学教授

- (三) 歐陽修
- (四) 蘇軾與遠離女性化
- (五) 詞論的肇始
- (六) 周邦彥

十 「非文藝」散文

- (一) 筆記與小説
- (二) 詩話
- (三) 鑑賞文學
- (四) 非正式書信

第四章「文化唐朝」を受けた第五章「北宋」は真宗末期から仁宗初期という時期に始まる。この時代の文学に一番大きな影響を与えたのは印刷術の普及であるとする。先ずは官学や国学が経書や類書を出版するのに使われ、次に十三世紀の中頃にかけて、商業出版が帝国の各地で活躍し、商人の趣味に合致した作品であれ、エリート層の嗜好に合った作品であれ、書物の数が飛躍的に増加したことが指摘される。さらにこの時代のもう一つの特徴として、儒家思想の復興と発展、禅宗や天台宗の復興とそれらが多量の在家の詩人を引き付けた事実が指摘される。印刷技術の普及により、書物が容易に手に入るようになり、黄庭堅の「無一字無來歴」の詩学を可能にした、という見解は興味深い。またこの章段では、詩僧の作品が取り上げられ、また蘇軾の散文のスタイルが華嚴經の影響を多大に受けている、といった錢謙益の指摘まで紹介されている。また第五章の「宋词」は簡にして要を得た「詞」の歴史の記述であり、一読をお勧めする。「非文藝」散文は後の小品文の起源を詳述したもので面白い。蘇軾が若年の折、詞には興味を感じず、詞が「女性化した感情」のみを強調し、その他の感情を排除していると考え、弟子の秦觀が愛情に関わる詞を書いたことを批判していたことを述べた後、次のように書いている。「蘇軾が大量の詞を書き始めたころ、彼の創作方法は全く別の局面を生み出し、この問題に真正面から向き合った。彼は、序を詞の作品に書き加え、それらの詞を書いた状況を記録するという、かくのごとく明確な自伝の方式で創作したのである。というわけで、(詞の) 創作はもはや作者の生活と切り離せなくなった。例えば、中秋節に自分の弟を思いやり、徐州郊外の燕子樓を訪問し、かつてそこに住んでいた女主人を夢に見、元夫人の十回忌に彼女を回想し、揚州城外にある歐陽修が建てた平山樓を訪れ、晩年の歐陽修を回想した、といった詞を作っている。」(447頁)

第六章 北與南：十二與十三世紀 傅君勸 (Michael Fuller)⁸、林順夫 (Shuen-Fu Lin)⁹

- 一 「中國轉向內在」時代的文學 林順夫
 - (一) 北宋亡於女真
 - (二) 中國轉向內在
 - (三) 北宋覆亡對學術與文學的衝擊
- 二 文與道：道學的衝擊 傅君勸
 - (一) 道學對緣飾語言的批判
 - (二) 內在性的文學與轉向外在的反向運動
 - (三) 初期：美學與哲學議題在楊萬里和陸游身上會合
 - (四) 初期：朱熹與文本的透明性
 - (五) 十三世紀初葉：「理」的各種立場
 - (六) 南宋後期：道德自我的詩學
- 三 文學的社會世界：團體與結社、以及印刷術的影響 傅君勸
 - (一) 印刷與考試文化
 - (二) 南宋的官刻與私刻
 - (三) 詩歌風格與文學菁英
 - (四) 詩人團體：風格的社會組織
- 四 截止到一二一四年的金朝菁英文學 傅君勸
 - (一) 金朝初葉：「借才異代」
 - (二) 中期：世宗與章宗朝、歷史與文化語境
 - (三) 世宗與章宗朝的文學
- 五 專業性與藝術手法 林順夫
 - (一) 古典詩歌
 - (二) 詞
 - (三) 散文
- 六 城市生活之樂 林順夫
 - (一) 南宋的都市發展
 - (二) 文學中的都市生活刻畫
 - (三) 宋朝都市裡的娛樂

8 カリフォルニア大学アービング校中国文學教授

9 ミシガン大学アジア言語文化学系名誉教授

七 南宋覆亡 林順夫

- (一) 蒙古征服南宋
- (二) 文人轉爲戰士
- (三) 宋朝遺民作家風格多樣
- (四) 對南宋文化的懷念與批評

第六章 「北與南：十二與十三世紀」は、南宋と金が対峙した複雑な時代を扱ったもので、非常にスリリングな記述が多い。最も精彩に富むのは、道学の世界認識と詩人の関係を扱った「文與道：道學的衝擊」である。「自覚を以て詩歌に内在する資源を基礎として、直接的な経験とは一線を画する」(481頁) 江西派であったのに対し、「楊萬里は、世界を経験することこそが詩の材料であり、内在する資源やそれに対するコントロールは重要度が低い、ということを発見した。」(483頁) と述べ、楊萬里と朱熹や陸九淵の世界観を比較する。このあたりの章段はとても刺激的である。また金朝の文学の領袖の一人趙秉文について次のように紹介する。「趙秉文が1185年に進士に及第した時、世宗二十八年の統治はすでに末期を迎えていた。彼は金朝の重要な文化人となり、四たび皇帝の心腹の臣下となった。これは彼の才幹が人並み優れていたことにもよるが、やはり部分的には政府の官僚と国家の官僚予備軍のグループが、趙秉文が体現していた文明と文化の価値観を受け入れることが可能となるまでに成熟していたことにもよる。章宗の性格は世宗ほどには強靱ではなかったが、有能な管理者であり、重要な改革を実施した。蒙古の脅威は不断に迫りつつあり、天災は頻繁に発生し、1206年には南宋との戦争も起こったが、章宗は文官が支配する政府の重要性を信頼していた。趙秉文は歴史に通曉し、常に中国の歴史的文献を引いて章宗のためにたびたび疑念を解消した。この他、金朝のエリートについて言えば、趙秉文は多様な才能を持つ人物として模範となった。趙秉文は過去に学びながらもそれに拘泥せず、彼が身に付けた学識は文学に対して有用であるとともに、政治や道徳に対しても有益であった。」(512頁) 趙秉文についての言説で、ここまで行き届いたものを私は見たことがない。

第七章 金末至明初文學（約一二三〇—約一三七五） 奚如谷 (Stephen West)¹⁰

- 一 概述
- 二 一三〇〇年之前的北方創作
- 三 一三〇〇年之前的南方創作

10 アリゾナ州立大学アジア研究センター主任グローバル研究院言語と文学系講座教授

- 四 元詩四大家
- 五 外族作家
- 六 一三七五年之前的詩歌
- 七 辭賦
- 八 元代白話文學
- 九 散曲：詩歌混合的形式
- 十 尾聲

第七章の「一三〇〇年之前的北方創作」と「一三〇〇年之前的南方創作」ではそれぞれ元好問を中心とした北方文壇、月泉吟社を中心とした南方文壇の情勢が要領よく語られる。元曲や平話は「元代白話文學」でさりと触られた後で、奚如谷氏が最も重点を置いているのは何といても散曲であろう。北宋時代、曾敏行が、「先君嘗て言う、宣和の間、京師に客たりし時、街巷鄙人多く蕃曲を歌う、名づけて曰く、異國朝、四國朝、六國朝、蠻牌序、蓬蓬花等。其の言至俚にして、一時の士大夫も亦た皆これを歌う。」(612頁)と述べているように、北宋末にはすでに北方の音楽が山西から流入し、説唱文学や様々な表現形式に吸収されていったことが読み取れる。対句の使用、三四文字を費やす擬態語の使用、衬字の使用などから、「散曲は上演の環境から本格的に離れることはなかった。」(613頁)といった指摘がなされる。散曲の内容については、「このような雅俗の結合は、博学の士の手になる散曲においてさえも、雅文学の基本的な規範を徹底的に逸脱し、それによって散曲は社会の垣根を超越し、エリート層内外の読者を獲得したのである。特に初期の散曲作品の中に、我々は殆んど比や興の表現技法を見出さないと分かり易く説明している。韻律、衬字（唱詞に嵌め込まれているものの、韻律のリズムに数えられないもの）、押韻など、形式についてもきちんと説明されている。

参考書目

本巻作者簡介（依本巻目次排序）

索引

『劍橋文學史』卷下

聯經中文版序 孫康宜

英文版序 孫康宜 宇文所安

致謝 孫康宜

卷下導言 孫康宜

孫氏は「本巻の編集方針は明清から現代までの文学の演変を特に重視している。現在までの大多数の文学史では唐宋を重んじ、明清を軽視する傾向が表れており、近現代文学については一概に別扱いにして、古代文学とは繋げずに、一冊の本として仕立てている。…この本を読み終えた人は明清から現代に至るまで、文学がいかに豊富に多彩に変化し、近世の文学が詩詞賦などの限られた伝統的な文学ジャンルの枠をすでに飛び出してしまっていることを目の当たりにするだろう」と述べた上で、時代に沿って下巻の内容を紹介している。

第一章 明代前中期文學（一三七五—一五七二） 孫康宜

一 引言

二 明初至一四五〇年の文學

- (一) 政治迫害和文字審査
- (二) 宮廷戲曲和其他文學形式
- (三) 永樂朝の台閣體文學

三 一四五〇—一五二〇：永樂朝之後的文學新變

- (一) 舊地點、新視野
- (二) 戲曲和民歌
- (三) 八股文
- (四) 一四五〇年之後：台閣體文學的新變
- (五) 復古運動
- (六) 蘇州的復興

四 一五二〇—一五七二：中晚明之際的文學

- (一) 貶謫文學
- (二) 重建女性形象
- (三) 改造小説中之英雄主義
- (四) 戲曲的改寫與創新
- (五) 後期復古派：後七子

この章段では、明代の文学が比較的バランスよく記述される。そのなかでも、「復古運動」においては、「王陽明が内心の直覚 (intuitive mind) を強調したことが、復古派 (前七子) が詩の抒情性の探求を触発した」(55頁) と、王陽明の影響が強調され、「貶

謫文學」では楊慎が流謫先の雲南で、継室の黄峨と唱和した詩作が、黄氏の死後出版業者によって『楊状元妻詩集』及び『楊升庵夫婦樂府詞余』として刊行されたことが語られる。「重建女性形象」においては、明代において、古代の女性の作品が再発掘されたり、同時代の女性の詩作のアンソロジーが多数出版されたことが指摘される。「改造小説中之英雄主義」にも面白い指摘がある。嘉靖本の『三国志演義』以前の英雄像はステレオタイプの「尊劉抑曹」（劉を尊び曹を抑える）であったが、嘉靖本以降、曹操は目的達成のためには悪辣な手段も厭わないが、一方義理人情に厚く、陳琳を殺さず、關羽を解き放つ人物でもある。「曹操の英雄イメージの再構築は嘉靖本の偉大な成果の一つだと言えるだろう」（73頁）と述べている。ただ『西遊記』の一段で、「孫悟空はスーパーマンであり、千変万化する超能力を持ち、取經の仲間たちを救出する。彼の眼には、越えられぬ障害はなく、降伏できない妖魔はない」（75頁）と述べているのにはいささか合点がいけない。孫悟空はもちろん大きな能力をもつが、彼にはすべての妖魔を降参させる能力はなく、妖魔の正体を調査し、その元の主人に退治を頼んだり、どうしようもなくなると観音菩薩に出馬を要請したりする、コーディネーター的な存在ではなからうか¹¹。

第二章 晚明文學文化（一五七三—一六四四） 呂立亭¹²

一 引言：晚明與書籍史

二 菁英形式

（一）文社

（二）李贄：職業作家

（三）詩歌與詩歌理論

（四）詩歌與職業文人

（五）非正式寫作

三 小説與商業菁英

（一）引言

（二）『金瓶梅』

（三）小説評注

（四）敘事生態

11 この項目荒井健氏の講義録による。

12 イェール大學中國文學教授

(五) 馮夢龍與凌濛初

四 戯曲

(一) 南方戯曲の興起

(二) 『牡丹亭』與「情教」

(三) 作偽與崇尚真實

(四) 尾聲

第二章で興味深いのは、『金瓶梅』の一段である。先ず、成立年代、作者に関する諸説が紹介された後で、1590年代に初めてこの小説の存在について言及され、1606年までかかって完成され、長い間抄本として流通していたことが紹介される。続いて『金瓶梅』は『紅樓夢』と並べて、「家庭の領域にしか関心を払わない小説」(122頁)と評され、「小説の中心に位置するのは、金持ちの商人の西門慶と彼の六人の妻妾、彼の子供、召使たちである。小説は詳細にこの家庭の実際の環境を描きつくし、同時に未曾有の心理的リアリズムの手法を使って登場人物の相互関係を描き出す。この家庭の中では、妻妾たちは夫を独占できないために嫉妬しあい、誰もがこの家庭内で風上に立とうと意図して、すべての生殖能力は性的快樂のために浪費され、子孫を残すためには用いられない。多くの現代の学者たちにとって、このような家庭のイメージは帝国晩期の退廃・墮落の象徴と映っている。しかしこのようなイメージは『金瓶梅』に起因しているのである。」(123頁)とされる。そのうえで、『金瓶梅』が貪婪好色乱倫謀殺などに満ちた儒家の「反ユートピア」小説として革命的な存在であると結論付けている。戯曲の「南方戯曲の興起」では臧懋循の『元曲選』が元代のテキストそのものではなく、元雜劇の元のテキストと比較するとき、大きな編集、改編を受けていることにも言及されている。

この章段の最大の魅力は、「作偽與崇尚真實」で活写される柳如是を始めとする女性詩人の群像にある。萬曆年間には妓女、富裕な家庭の女性、などが詩を交換するネットワークを形成していた。「明朝の末年、我々は不思議な世界を見出す。悲劇性を帯びた妓女、王室に忠節を尽くす士人、エリート層の家庭の貞女、この三種類の人間たちは緊密に連携していた。しかし、彼らの完全な出会いは、明朝滅亡の直接の結果の後で顕著になった。この三種類の人間たちは政治的動揺の中にあっては、詩歌で自らを悲しみ傷んでも何のたしにもならないという点で一致していた。国家が崩壊する中、この三種類の人間たちのすべての層から、明王朝の殉難者が出たため、彼らの間の区別は消滅した。しかしこの三種類の人間たちのアイデンティティが曖昧模糊としていたという、長らく使われてきた比喩は、明王朝滅亡前の数十年間に遡ることができるのである。」(160頁)とあるように、妓女とエリート層の深い関係もここで取り扱われている。

第三章 清初文學（一六四四—一七二三） 李惠儀¹³

- 一 物換星移
 - （一）從晚明到清初
 - （二）清初人對晚明文化的回顧與反思
 - （三）文學的社會根基
- 二 清初文學的歷史與記憶
 - （一）面對歷史
 - （二）記憶文學
 - （三）風流雲散
- 三 新舊之間
 - （一）翻案與圓融
 - （二）奪胎換骨：評點、續書、傳承
 - （三）新典範、新正宗
- 四 別有天地
 - （一）幻界
 - （二）戲劇的總結與高峰
 - （三）一七二三年的文學景觀

第三章では、「面對歷史」において錢謙益と呉偉業の詩史の試みが論じられている。彼らは遺民と貳臣の間を揺れ動く複雑な心境を詩史の形で表現したのである。「記憶文學」でも、「詩史」と表裏一体の懷古性を帯びた錢謙益、王士禛らの文学作品に言及され、さらに「士大夫と名妓の愛情の物語を丁寧に記述し」（200頁）、「亡国の悲しみを託した兒女の痴情は英雄忠節の人たることを妨げないし、さらに一步進んで表面上の風流で放恣な態度も、実は道徳や勇気を包み隠していると暗示し」（201頁）た余懷の『板橋雜記』、「1639年に初めて出会い1651年に彼女が亡くなるまでの、名妓董白との縁を記述した」（201頁）冒襄の『影梅庵憶語』も登場しており、本章の中心となっている。また、「風流雲散」では、呉偉業の雜劇『臨春閣』が取り上げられ、正史では陳朝亡国の妖姫とされる張麗華が洗夫人とともに国事を処理し、傾きつつあった陳朝の国政を建て直したという、「欲望のメルクマールであった女性が女性の英雄に轉換した」（204頁）例としてあげられている。「幻界」においては、『聊齋志異』の物語の型が詳細に分析され、興味深い。「大部分の『聊齋』の物語では、欲望が達成されると同時に、道徳や社会の

13 ハーバード大学東アジア言語文明系教授

秩序も新たに肯定され、矛盾も消滅する。人間を誘い主体的に動いていた狐仙・精怪・女性の幽霊、女神は身を人間に委ねて意中の人を追いかけるが、彼女らは往々にして婦徳のある人妻に変身する。」(240頁)とも述べている。

第四章 文人の時代及其終結（一七二三—一八四〇） 商偉¹⁴

- 一 引言
- 二 漫長的乾隆時期：文學與思想成就
 - (一) 知識生活與文學流派
 - (二) 文人小説的形成
 - (三) 文人劇與地方戲
- 三 失去確定性的時代：一七九六—一八四〇
 - (一) 拓寬的視野
 - (二) 閩秀與文學
 - (三) 鞏固文人文化：前景與掙扎

第四章では清朝の極盛期とされる乾隆朝の文学が取り上げられる。「知識生活與文學流派」では、先ず紀昀の『閱微草堂筆記』と袁枚の『子不語』を対比し、前者は、「その逸事・奇聞は議論と説教が多く、物語は因果応報と、生死輪廻あるいはその他の解釈の枠に帰納されてしまう」(261頁)、後者は「脈絡のない暴力と驚天動地の恐怖がその書のいたるところに見られ」(260頁)と評される。詩の世界では、沈德潛、翁方綱、黄仲則らの詩が彼らの背景とともに記述される。目次には表れていないが、「文人小説的形成」は、『石頭記』(紅樓夢)と『儒林外史』を主に紹介する。先ず乾隆朝は章回小説が衰退期に入っており、この二つの小説は、それまで盛行を極めた、通俗演義、情色小説、才子佳人小説を前提として成立しているとする。商偉氏はそのうえで、『儒林外史』を科挙批判の書とか、周囲の文人たちを醒めた眼差しで描写した小説として解説はしない。「吳敬梓は語り手が全知全能の立場から物語るのではなく、読者に直接小説が叙述する世界を体験させようとしているのであって、語り手の完全で無謬の先導など必要がないと考えていた。曖昧な時間が流れるのは免れず、読者は常に自分で判断せざるを得なくなるのである。この意味において、『儒林外史』は我々が新しい視点で世界を見るように駆り立てる史上初の現代的小説となったのである。」(281頁)とあるように、非常に斬新なとらえ方をしている。

14 コロンビア大学杜氏中国文化講座教授

『石頭記』については、先ず極めて複雑なテキストの成立過程を概観した上で、『石頭記』は時代の辺境地帯に身を置いていただけでなく、同時代の思想や文化の主潮から意識的に遊離していた。『石頭記』は同時代の思想と文学の言語には関わらなかったし、『石頭記』の叙述も当時の事物をほとんど含まない。これは曹雪芹が外部の要因の刺激や、同時代の相対的な文化の環境総体から利益を受けなかったわけではなく、視線を彼の直接の言語環境の外に向けていたからなのである。更に重要なのはおそらく、彼は自分の材料—「情」と「誠実」などの内側に包含するものがとても豊富な概念から、自らが踏襲した章回小説まで一を用いて、改造を加え、新しい様相をそなえたまったく異なった作品として巧妙に仕上げたのである。この意味において、曹雪芹が彼の同時代にもたらしたものは、彼がそこから得たものよりも多かったのである。彼は『石頭記』において、自分の文学と思想の世界を創造し、我々は『石頭記』によってその時代の文化の成果を評価せざるを得ないのである」(296頁)といった、新たな見解が展開されている。

「鞏固文人文化」の冒頭部分は大陸版と台湾版では、異なった部分がある。台湾版は「十九世紀上半葉、文人士大夫深深介入當代的思想 and 學術論述（大陸版は「論述」を「話語」に作る）、因此也很難與其的文學追求分離出來、進行孤立的考察。」(336頁)であるが、下線部は大陸版では「把他們的文學追求」となっており、おそらく大陸版が正しいと思われる。

第五章 説唱文學 伊維德 (Wilt L. Idema)¹⁵

- 一 引言
- 二 早期的敘事詩、變文和諸宮調
- 三 早期的寶卷和道情
- 四 詞話和俚曲
- 五 表演與文本
- 六 鼓詞、子弟書及其他北方説唱類型
 - (一) 鼓詞
 - (二) 子弟書
 - (三) 其他類型
- 七 彈詞和江南地區其他説唱類型

15 ハーバード大学東アジア言語文明系教授

- (一) 白蛇和小青
- (二) 彈詞表演
- (三) 女性彈詞創作
- (四) 清曲和山歌
- 八 南方傳統說唱
 - (一) 木魚書
 - (二) 竹板歌和傳仔
 - (三) 湖州歌冊和台灣歌仔冊
 - (四) 女書文學
- 九 寶卷（續）
- 十 四大著名傳説
 - (一) 董永和織女
 - (二) 孟姜女和長城
 - (三) 梁山泊與祝英台
- 十一 結語

下巻の第五章はおそらくケンブリッジ中国文学史の最大の特徴の一つと言える。従来の文学史では「説唱文學」を変文から説き起こし、諸宮調、寶卷、鼓詞、子弟書、彈詞、木魚書、竹板歌まで詳説した例はないのではないだろうか。女性による彈詞の創作や、女書による歌謡の記録など女性の文学に対する目配りも他の章段同様にきいている。彈詞の部分では、『西遊補』（評者注：第十二回）が彈詞の上演の例としてあげられていたのには驚かされた。最後の「四大著名傳説」は中国の俗文学世界では永遠の題材となっている四大伝説の起源と発展が概述されていて極めて便利である。

第六章 一八四一—一九三七年的中國文學 王德威 (David Der-wei Wang)¹⁶

- 一 一八四一—一八九四：文學寫作與閱讀的新論争
 - (一) 從龔自珍到黃遵憲：詩學的啓示
 - (二) 文的復興：桐城派的悖論
 - (三) 頽廢與俠義：早期現代小説的興起
 - (四) 早期現代文人的形成
- 二 一八九五—一九一九：文學的改革與重建

16 ハーバード大学東アジア比較文学系Edward C. Henderson 講座教授

- (一) 文學改良的論争
- (二) 晚清文學生産
- (三) 小説的多重軌跡
- (四) 革命 (revolution) 與迴旋 (involution)

三 一九一九—一九三七：現代文學時期

- (一) 五四運動與文學革命
- (二) 現代初期：一九二〇年代的文學和文人文化
- (三) 鴛鴦蝴蝶派
- (四) 從文學革命到革命文學
- (五) 與現實主義對話
- (六) 抒情中國
- (七) 現代主義：上海、北京及其他地方

四 翻譯文學、印刷文化和文學團體

- (一) 西方文學和論述之翻譯 石靜遠 (Jing Tsu)¹⁷
- (二) 印刷文化與文學社團 賀麥曉 (Michel Hockx)¹⁸

五 尾聲：現代性與歷史

第六章の初めに位置する「從龔自珍到黃遵憲：詩學的啓示」では、その後の文学革新運動にインスピレーションを与え続けた龔自珍を取り上げる。「批評家たちはかつて龔自珍を時代の帝国崩壊の予見者であり、清中葉以降、最も注目を集めた作家であると高く評価している。十九世紀初期の中国の危機を描写する時、彼は伝統的な中国文学の二つの脈絡を合一した。一つは司馬遷の史記に代表される歴史記述であり、もう一つは屈原の離騷を開祖とする情感の表出である。しかしそれだけでは彼は現代文学の先駆者の地位を確立することはできない。龔自珍の独創的な貢献は、歴史的な見識と抒情を融合させ、一つの文学のスタイルを創造したことである。この文学スタイルは一見して見慣れたものであるが、細かに読むと伝統的なスタイルとは根本的に異なっているのである。」(409頁)と述べ、その影響が巨大であったとする。龔自珍の後には、樊增祥らの晚唐派、陳三立らの同光体、最後に詩界革命の先駆者となった黄遵憲が論じられる。晚清時代の古典詩文の歴史は通常の文学史ではあまり触れられないので、とても貴重である。小説の分野では『品花寶鑑』『海上花列傳』などの邪界小説から『兒女英雄傳』『三

17 イェール大学中国文学教授

18 ノートルダム大学中国文学教授

俠五義』などの武俠小説、魯迅や郁達夫、さらには李劫人の小説、現代詩、女性作家の創作まで、この章で扱われている作品は非常に幅広く、驚くべき情報量を誇る。翻訳と出版文化を扱った「翻譯文學」、「印刷文化與文學社團」も、あまり注目されてこなかった話題であるが、『萬國公法』や『聖書』に始まる実に多様な翻訳文化を鳥瞰させてくれている。「十九世紀、二十世紀の狭間に翻訳は実に不可思議な様相を呈した。古文、白話文、西洋の文法、無名あるいは捏造された作者が混在しさえし、大衆消費のグループのために、新思想を伝えた。原文は翻訳の過程でよく改竄されたし、翻訳の手法は種々雑多であり、訳者の名前の横に「訳述」「編訳」あるいは「演訳」などと傍注が施されていた。」(514頁) また、翻訳文化における魯迅、周作人の『域外小説集』の革命性が以下のように強調される。「魯迅と周作人は梁啓超が翻訳小説を政治の道具と見た近視眼的なものの見方や、林紓の風格を尊重するあまり正確性を重視しない翻訳姿勢とは異なり、彼らは翻訳者の社会的責任と原文に忠実な翻訳の二つを同等に追求したのである。」(517頁)

第七章 從一九三七年迄今の中國文學 奚密 (Michelle Yeh)¹⁹

一 引言

- (一) 抗戰文藝
- (二) 統一戰線：重慶
- (三) 日趨成熟的現代主義：昆明與桂林
- (四) 淪陷北京的文壇
- (五) 上海孤島
- (六) 香港避難所
- (七) 延安與整風運動
- (八) 殖民地台灣

二 内戦結束及新時代的開始 (一九四九—一九七七)

- (一) 中華人民共和國
- (二) 台灣
- (三) 香港

三 互動與抗爭 (一九七八年迄今)

- (一) 中國大陸

- (二) 台湾
- (三) 香港
- 四 印刷文化的近期轉變與新媒體的興起 賀麥曉
 - (一) 中國大陸國內出版體系的轉變
 - (二) 海峽兩岸出版及國際版權貿易
 - (三) 全球文學市場
 - (四) 新媒體
 - (五) 論壇
 - (六) 審查
 - (七) 網絡文學與印刷文學的關係

第七章は大陸版と、台湾版では大きく異なっている。大陸版の目次は次のようになっている：

第七章 1937-1949年の中國文學 奚密

引言

I 抗戰文藝

II 統一戦線：重慶

III 日趨成熟的現代主義：昆明與桂林

IV 淪陷北京の文壇

V 上海孤島

VI 香港避難所

VII 延安與整風運動

VIII 台湾

つまり、大陸版は「二 内戦結束及新時代的開始」「三 互動與抗爭（一九七八年迄今）」「四 印刷文化的近期轉變與新媒體の興起」が削除された形跡をなるべく目立たないようにするために、「引言」以下七つの独立した節が立っているような体裁にしてある。また、結語の「華語語系書寫與華人離散」もなぜか削除されている。以下第七章の内容をざっと見ていこう。「引言」では日中戦争の概略が述べられる。南京事件に関しては、「南京政府軍事法廷の資料によれば340万人、極東軍事裁判の資料では20万人の犠牲者が出た」（542頁）と記述されるが、中国政府が犠牲者の数としてあげる30万人をはるかに越える数字であり、疑問を呈しておきたい。「南京図書館から略奪された80万冊余りの書籍が日本に運ばれた」（542頁）という一行もあり、確たる根拠があるのかどう

か、これも一考を要する。南京図書館から香港に疎開していた書物を日本軍が接収し、それを日本に持ち帰ったが、敗戦後にGHQの命令で返還された、という論文²⁰は読んだことがあるが、80万冊は多すぎるのではないか。もしこの書籍が現在も返還されていないとすれば、中国政府から強硬な返還要求が来ると思うのだが、いかがであろうか。

「戦争はもとよりそこから逃れることのできない現実ではあるが、作家が描写しようとした唯一の対象ではない、ということ本章において明らかにしようと思う。逆に抗戦時期の文学は題材においても、スタイルにおいても、非常に多面的であり、一流の優秀な作品に事欠かないのである。」とあるように、「引言」の中の八つのパートでは、抗日戦争当時の各地における多彩な文学活動が時代背景とともに描かれる。重慶での曹禺らの戯曲、老舎の小説、昆明における西南聯合大学を中心とするモダニズム文化の発展、北京での周作人の小品文を中心とする創作活動、天才詩人呉興華の出現、「孤島」上海における張恨水、錢鍾書の活動、香港における戴望舒、蕭紅の活動、そして植民地であった台湾における漢語、日本語による創作活動にも言及されている。「延安與整風運動」では、1941年5月、毛沢東が発動した整風運動の最初の犠牲者となった王實味（1906-1947）が登場する。彼は後に反右派運動で批判された胡風の北京大学での同級生で、1937年に延安に到着した。1942年に『解放日報』等で発表した文章において、延安の高級幹部の特別待遇を批判した。彼を先頭に立って批判したのが周揚で、王實味は1947年に「トロッキスト」として秘密裏に処刑された。また丁玲も王實味と同様の罪名を着せられ、毛沢東の庇護がなければやはり粛清されていた、といったことにも触れられている。

大陸版では削除されている1949年以降の部分にも触れておこう。第二節の「中華人民共和国」は「時代之始：文化政策和思想控制」、「歴史小説和批判的現實主義」、「反右派運動及文化大革命的前奏」、「地下文學和文化大革命」の四つのパートに分かれ、中華人民共和国の建国から文化大革命の終息までの政治と文学の状況が極めてコンパクトにまとめられており、驚嘆に値する。政治的事件について言えば、「大躍進」にともなう飢饉で3800万人が餓死したことに触れられている半面、文化大革命の犠牲者数に關しての言及はない。この中で最も面白いのは、文化大革命中の「X 詩社」を初めとする地下活動であろう。地下活動の構成員は高級幹部、文化人の子弟で、個人の家に集まって文学芸術哲学音楽書を読んだという。ボッカチオの『デカメロン』、大デュマの『モンテ

20 梶谷純一「帝室図書館の略奪図書」（『情報学』6（1）、2009年刊行）によれば、「略奪図書」の合計は130219冊であり、その約半数が、日本陸軍が香港で接収したものである、という結論になっている。

クリスト伯』、カフカの『審判』、イリア・エルレンブルグの『雪解け』、サルトルの『嘔吐』、ベケットの『椅子』、サリンジャーの『ライ麦畑で捕まえて』、などを閲読し、ビートルズの音楽にも触れたという。彼らの組織「太陽縦隊」は1966年に摘発され、構成員は死刑判決を受けたり、自殺したり、国外に逃亡したりし、その他詩や小説も写本の形で広く流通したと記述されている。

同時代の台湾や香港における文学活動も「白色テロ」や右派と左派のせめぎあいといった政治的な状況と絡めて説明され、近年ブームとなっている台湾文学を理解する基礎的知識を提供している。香港の部分では、香港の地理的な特殊性から、モダニズムとポストモダニズムのいりまじった作風が盛行したことに触れられており、梁羽生と金庸による現代武侠小説の創始と流行についての簡潔にして要を得た説明もみられる。

「互動與抗爭（一九七八年迄今）」では文革終息以降の文学史を扱っているが、大陸においては文革終息直後の「傷痕文学」にはじまり、改革開放から六・四（書中では「天安門大屠殺」と称される）までを啓蒙の時期と名付ける。「この事件によって1980年代の文化的な討論は突然終わった。理想主義とユートピア主義を中心とする啓蒙の時代は蒸発してしまった。」(640頁) その後の事情は「六四後の中國文學」で紹介される。台湾も民主化以降の文学に言及され、「原住民文學與族群書寫」では先住民族の作家の手になる作品が列挙されており、貴重な情報に触れることができる。また特に「性別與性」では性に関する表現、フェミニズムの主題、同性愛に関する小説と詩が論じられている。香港の部分では、返還が決定してから香港の過去を懐旧する作品が流行し、張恨水風の作品も数多く生まれたこと、台湾同様同性愛に関する作品の記述がある。「網絡文學與印刷文學的關係」は、現代の中国文学のグローバル市場における地位、インターネット上の文学活動、文学に関するスレッド、検閲、インターネット文学と印刷文学の関係など興味深い話題にあふれている。

結語 華語語系書寫與華人離散

この章段では、標準語、方言、外国語による、華人の創作を取り上げる。自作を英語に翻訳した張恨水、老舍、流寓先のフランスで中国語を用いて創作しノーベル文学賞を獲得した高行健が例としてあげられる。最も興味深いのはマレーシアで活躍する華人作家李永平の例である。彼は言う：

外国語教育は言語を弁別する能力を養成する—中国語とは何か？英語とは何か？私は「悪い方向に西洋化した」中国語を容認できない。文化と言語の「買辦作風」は最も汚れた存在である。…後に『吉陵春秋』を書き綴った八年間は中斷を挟んで、苦心慘

澹した。その目的は純粋な中国語の文体を精錬することであった。(680頁)

「李永平は台湾の最も傑出した作家の一人である。彼は近代中国がその文化の精髓から逸脱したと批判する。外国の語彙を文法に侵略されて「悪い方向に西洋化した」中国語に対応するために、李永平は中国語を浄化する重任を担おうとしているのである。」(681頁)彼の傑作『吉陵春秋』は「中国の北方方言の口語のスタイルを思わせる文体で書かれているが、当地の本物の口語には対応していない。」このような例を糸口にして、「ずっと覇権を享受してきた伝統的な文学のモデルと、文化多元主義の間の文化権力の流動」(686頁)をさぐるようとしているのである。

参考書目

本巻作者簡介（依本巻目次排序）

索引

以上が『劍橋中國文學史』の目次とその概要であるが、以下にその特徴をまとめてみよう。

一) 時代時代の歴史的な事象と、文化史を幾重にも結びつけていて、重層的な構造になっている。たとえば古代における出土文物と『詩經』や『尚書』のテキストの関係、紙の発明や印刷術の普及による文学や文学理論の変革、インターネットによる中国文学のグローバル化など、他の分野と徹底的に関連付けて記述している。

二) 一との関連で、文学作品の引用、解釈、鑑賞は最小限に留められている。例えば、『世説新語』の引用は皆無であるし、杜甫、杜甫、白居易そして李商隱などの人口に膾炙したいわゆる名作、「春望」、「長恨歌」、そして有名な「無題詩」（相見時難別亦難）、は収められていないし、作品を「文学的」に鑑賞することは殆んどない。また、作者個人の履歴にもそれほど関心が払われているわけではない。ただし、その詩人に関する必須の情報は実にコンパクトにまとめられている。李白の条を見てみよう：

李白は地方出身者であるだけではない、多くの学者が先祖には少なくとも漢族以外の血統が混じっているだろうと考えている。彼は四川の田舎で育ち、少年時代にはかなり不良であったと詩の中で自称しているが、彼は読書を渴望する人でもあった。李白は非常に博学であったが、修辭学の訓練を受けたことはない。彼の作品には文体の訓練やコントロールの痕跡はほとんど見られない、この種の文体訓練やコントロールは、王維の第二の天性といえるだろう。李白について言えば、これはある種の自由であって、そのおかげで未曾有の方式で創作することが可能になったのである。彼は演技の天賦の才能を持ち、一人の怪人物、alcoholic、道家の弟子という自画像を創造し、

詩歌を通してこのイメージを宣伝・普及した。725年に四川を離れると、長江に沿って下り、彼のパトロンを探し、同時に道教の修行をし、旅行の楽しみを享受した。彼の名声は徐々に揚がり、742年に招請に応じて入朝し、翰林院に職を得た。李白は科挙に参加したことはなかった。恐らく誰も彼に科挙試験に参加するよう提議したものがいなかったのであろうし、科挙に及第できたとも思えない。しかし、八世紀の40年代、詩歌の才能はすでに科挙試験によって周知される必要がなくなっていたのである。…樂府や歌行、そして即興の作品が彼のもっとも知られた作品であることは否定できないが、彼の詩集にはなお大量の、それほど読まれていない友人に贈った作品が存在しており、それらの「友人」の多くはおそらく彼のパトロンであったろう。我々は李白を中国最古の「職業」詩人と見做すことができるかもしれない。(319-320頁)

三) 不思議なことに、宋代に関しては今書いてきたようなこととは異なった方針で書かれている。歐陽修、王安石、蘇軾などには大幅な紙幅が当てられ、「王安石：詩人そして政治改革家」という題に表現されている通り、家庭環境、進士及第後の官歴、「新法運動」詩風、詩法(典故運用の妙)などなど、普通の文学史よりも詳しく触れられている。宋代だけは特殊な感じがある。

四) 「第五章 説唱文學」では、説唱文學が通時的に取り上げられ、非常に幅広い知識を得ることができるし、「第七章 從一九三七年迄今的中國文學」では、大陸以外の台湾、香港の文学状況が詳細に描写されているなど、特色をもった構成になっている。

五) 巻末の索引は大陸版がピンイン引、台湾版が画数引であり、項目の所在箇所を示す数字は、大陸版が聖書のような節(ただし全体の通し番号になっている)、台湾版は頁数となっている。また参考文献は紙幅の関係から英文の文献のみになっている。これから欧米への留学を志そうとしている学部生、大学院生にはきあめて便利である。

最後に巻下の裏表紙に掲げられている編者の一人孫康宜教授による惹句を引用しておこう：

我々は、読者が『劍橋中國文學史』をあたかも小説を読むように、頭から最後まで読んでいただきたいと思う。我々の目的は通読してもらうことであり、参考書として供することではない。我々の目標は伝統的な文学史を書くのではなく、一冊のより興味深い、文学文化史を書くことである。

結語

残念なことに、『劍橋中國文學史』の英語版、大陸版、台湾版を架蔵している図書館

は全国でもそれぞれ一か所にとどまり、少なくともGoogleで検索する限りは書評も出ていないようである。この拙い文章を目に留められた学部生、大学院生の皆さんは、是非大学図書館に購入をリクエストするか、大枚数万円をはたいて購入し、目を通していただきたい。中国文学や、その研究方法に対する見解が根本的に変わるかもしれないし、あるいは進学先として日本や中国大陸を目指すのではなく、欧米の大学を目指す人が出てくるかもしれない。事実、この本の主編の一人である孫康宜氏、近来の錢謙益研究の第一人者である嚴志雄氏はそれぞれ台湾、香港の大学からアメリカの大学に進学されたのであった。

一つしか購入できなければどれを推薦するかと問われれば、迷わず台湾版を推す。繁体字、縦書きは何といっても読み易い。簡体字、横書きもいいのであるが、一目で目に入る情報量が多すぎて、ゆっくり意味をとりながら読むのには不向きと思われる。もちろんこれは好みの問題であり、台湾版には少ないながらも誤植らしき箇所も見られるので²¹、一概には論じられないのだが。英語版のよさは、もちろん原著であるということと、引用の詩文が平易な英語に翻訳されている点である。

自分が大学院生の時に、『劍橋中國文學史』を通読し、中国の文学史、文化史、歴史をここまでの高みから（もちろん一種の錯覚なのであるが）眺められていたら、と慨嘆するのみである。以後、自分もこの『劍橋中國文學史』を再三読み返し、いろいろなカテゴリーをタテ・ヨコ・ナナメに結び付けてゆく、この不思議な魅力をもった書物の探検を続けていこうと考えている。

21 下巻第四章で指摘した誤植の他に、もう一か所だけ挙げておく。台湾版55頁第4行に、「但《詩經》也有不起的呈現多聲部表演的文本」とあるが、大陸版によって同箇所を確認してみると、下線部は「了不起」となっていて、誤植と分かる。このような例はまだ存在しているかもしれない。